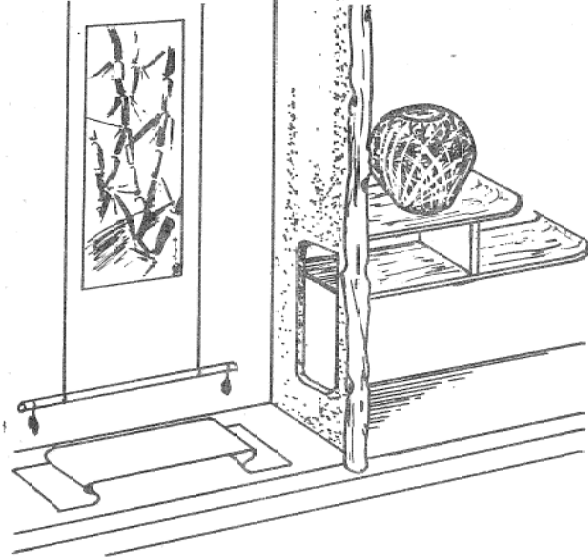


私の趣味 —南画—



自画自讃

大阪大学工学部精密工学科

津和秀夫

「八洋画伯」ハテこんな画家があったかなと、いくら考えても思い出すのは無理だ。この画伯、もちろん無名、おまけに画も下手くそと来ているから取りえがない。ただ名前だけは世界の七つの海よりも一つ多いぐらいに壮大なもの、そして変てこな画を描きながらも、1,000年後には真価が認められて、国宝か重文クラスになること確実とうそぶいているから無邪気もよいところ。この「八洋先生」こそ、外ならぬこの私だ。

さて、私の南画自慢話から始めさせて頂こう、私の書斎は三帖の小部屋だが、「竹の間」と名付けて得意になっている。四枚襖の全面に実物大の孟宗竹を10本ほど画いてある。題して「竹林煉想」とある。反対側には特に立派な竹を1本、「生育至天」と讃がある。

一人静座すれば、王に「竹林の七賢」のように、思想は泉の如くこんこんと湧き出でて止まない。もちろん机側の火鉢で酒を温ため、かつ飲み、かつ考え、かつ書くうちに、夜の更けるのも知らず、というところ。ただし、やがて睡魔の誘惑に堪え難く、蹠蹠そつそつと寝室に消えることとなる。「寝る児は育つ」のたとえ、「生育して天に至る」とは、このことを指すものらしい。

私は毎年3月に研究室を巣立つ大学院と学部の卒業生に色紙を押し付けることにしている。

いや応なしにもらってもらわうわけだ。そのときには必ず「これはそのうちに50万円の値が出る」という言葉を添えることを忘れない。しかし「そのうち」が何年先か何千年先かは言わぬことにしている。とにかく一枚50円の色紙が1万倍になるのだから芸術の方は大したものだ。ただし、現在の相場では、白いままの方が高く買ってもらえるというのだから情ない。

「先生の画を頂きたいわ」というママさんの言葉を真にうけて、「画伯というものは、飲み屋の払いは画でするもの」とばかり、ひょうたんに梅の小枝をあしらったものを抱えてのれんをくぐった。もちろん即座に壁面を飾ることと



美人弟子を迎へ  
八洋先生ますます盛ん

なり、大得意でいつもの倍は徳利を空けた。それから足繁く通ったことは当然の帰結だが、ある夜突然名画が消えていたのにはガッカリ、このようなとき画のことは触れないのが、お客とママさんのエチケットというものだ。結局払いの方は少しも安くならなかったことを記して、後世画伯への忠言としたい。

その私にも、最近女弟子ができたので世の中はよくしたものだ。彼女は九州に住む友人の奥さんで、通信教授ということになる。秋に泊めて頂いたとき、奥さんは私の師匠に通信で習いたいとおっしゃった。そのときは師匠に伝えるつもりだったが、後で考えると「八洋画伯」の

代稽古の方がよいという結論になって、ショートカットしたわけ。

私の先生は、日本一の大家と思っている。土に生き土に育った農民画伯で、またロマンチックな田園詩人でもある。75才の「青年」と呼ぶにふさわしいほど若々しい純情家、透徹した人生観をもつ巨匠だ。だから俗人には真価がわからない。従って日本一の「志染先生」も現世では無名ということになる。その一の弟子が「八洋画伯」だから、これは日本南画界の第2位ということになる。と書いて「自画自讃」を終わりたい。（画は題して「夫婦松」それぞれの意味するもの、ご想像にまかせます。

